

「良い助産婦さんでどんな人ですか」という質問に、ためらいもなく「お産が好きな人、人間が好きな人」と答えた助産婦さんに出会いました。「毎回のお産が私の教科書」「とにかく生まれて来る瞬間が好き」と言い、「私は産婆だ」とおっしゃいます。力強くやさしくて、思わず元気づけてもらいたくなるような助産婦さんです。

家族に囲まれて、精神的にゆたかなつながりを感じながら産むことを「ゆたかなお産」と表現した助産婦さんもいます。「私の夢は台所を開放すること」「誰でもが立ち寄れる場を持ちたい」と語ってくださいました。彼女の持つ雰囲気は穏やかで温かく、ついゆっくりと話し込みたくなってしまいます。

日本の現在の助産婦さんたちのことを研究しようと思い、訪ね回り始めて数か月がたちました。助産婦さんたちと話すのはいつも楽しく、時を忘れて相手の語りに聞きほれてしまいます。彼女たちは、経験の積み重ねの中から紡ぎ出す珠玉の言葉を持っているようです。それは、愛着をもって自分の仕事に従事している人のみが発することのできる言葉のように思えます。

これらの出会いを通じて私が学んだのは、助産婦さんとは、産む人たちがいかに出産を楽しんで迎えられるか、生まれてきた子供をどのように受け入れるのかを方向づけてくれる、お産というドラマの演出家のような役目を果たしているということです。

けれども、これから出産しようという私たちにとって、助産婦さんという存在は、果たして馴染み深いものなのでしょうか。まわりの人たちに聞いても、家に近い、大きな病院なら安心という程度の情報で分娩施設を選択しているようです。その上、病院でお産に立ち会ってくれるのは看護婦さんで、助産婦さんがいるなんて知らなかったという話も時々聞きます。まして、開業助産婦さんの存在や、自宅分娩が可能なことを知らない人たちは多いのです。

劇場や映画館、レストランや転職に関してたくさん情報誌があるように、助産施設や助産婦さんについての情報源があるのでしょうか。確かに、妊産婦・赤ちゃん向けにそれぞれ専門誌が何種類もありますが、それだけで知りたいことが知りたいように調べられるのでしょうか。一見、こんなに情報に満ちあふれた世の中なのに、いざ探してみたら助産施設だけの案内書すらないのには本当に驚いています。

どうやら産む人たちは、口コミという強力な情報網を持っているようです。その情報網を利用すれば、たいいていの自分の知りたいことはわかるとも聞きます。しかし、産む人に発見してもらうのを待つばかりで、本当に良いのでしょうか。あらゆる情報を満載したものでなくても良いのです。どんな助産婦さんが、どこにいいのかわかるような案内書を、助産に従事する側が提供してくれたなら、素敵な助産婦さんの存在がもっと広く知られるようになるのにと、残念がっているのは私だけでしょうか。